様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 5 日現在

機関番号：13601
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22401040
研究課題名（和文）　現代アフリカにおける独裁者の虚像と実像に関する民族学的研究

研究課題名（英文）　Ethnological Study of the Virtual and Real Images of Dictator in Modern Africa

研究代表者
阿久津　昌三　（AKUTSU SHOZO）
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：30201883

研究成果の概要（和文）：本調査研究の目的は、現代アフリカにおける独裁者の虚像と実像に関する民族学的研究という研究課題のもとに、（１）軍事独裁、（２）一党独裁、（３）個人独裁という３つの政権の実態があることを探究することである。現代アフリカの７カ国、６独裁者（為政者）について現地調査を実施した。具体的には、ンクルマ（ガーナ）、セク・トゥーレ（ギニア）、ケニヤッタ（ケニア）、ニエレレ（タンザニア）、アミン（ウガンダ）、モブツ（コンゴ）である。本調査研究は、権威主義的政権及び指導者を探究することによって、通時的、共時的な独裁の包括的分析を提示した。

研究成果の概要（英文）：This study assumed that there are three definitions of regimes:(1)military dictatorships,(2)single-party dictatorships,(3) personal dictatorships under the theme of ethnological study of the virtual and real images of dictator in Africa. Field surveys were conducted on six dictators in seven countries:Kwame Nkrumah(Ghana),Sēkou Tourē(Guinea),Jomo Kenyatta(Kenya),Julius Nyerere(Tanzania),Idi Amin and Joseph Mobutu.This study offered a comprehensive analysis of dictatorships,covering a range of diachronic and synchronic research agendas devoted to authoritarian regimes and their leaders.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
2011 年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2012 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総　計	11,900,000	3,570,000	15,470,000

研究分野：文化人類学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：アフリカ、独裁者、東西冷戦構造、国際政治、政治哲学、政治思想

１．研究開始当初の背景

アフリカ連合（ＡＵ）は、2002 年にアフリカ統一機構（OAU）を改組して、アフリカの高度な政治的、経済的統合の実現を図るために、また、紛争の予防解決に取り組むことを強化するために発足された地域連合体である。アフリカ連合に正式に加盟している国は 54 か国である(研究開始時 53 か国)。これらの大半は「アフリカの年」とよばれた 1960 年前後に欧州列強の植民地支配を打倒して独立をはたしてきた国々である。これらの国々は 2010 年で独立後 50 周年を迎えようとしている。

現代アフリカの国家は、松本仁一によれば、

大別すると、(1) 政府が順調に国づくりを進めている国家、(2) 政府に国づくりの意欲はあるが、運営手段が未熟なため速度が遅い国家、(3) 政府幹部が利権を追いもとめ、国づくりが遅れている国家、(4) 指導者が利権にしか関心をもたず、国づくりなど初めから考えていない国家に分類される。

本調査研究は、現代アフリカにおける独裁者の虚像と実像に関する民族学的研究という研究課題のもとに、独立後 50 年の経緯のなかで独裁者とよばれた指導者（為政者）をとりあげその虚像と実像を明らかにしようとするものである。特に、独裁者の親衛隊を中心に形成された軍隊は、規律とイデオロギーによって、その母体の国民の総体よりも等質的であるがきわめて特殊な社会集団として、政治、経済、社会の諸分野において、重要な役割をはたしてきた。

軍部の政治的介入は、1960 年代なかば以降、また、70 年代から 80 年代を経て、90 年代においても変わることなく続いている。東西冷戦構造の崩壊にともなう民主化の動きのなかで、アフリカの政治体制は変質を遂げたが、1989 年を分岐点として、それ以前は、強権的政治体制（大統領に権力が集中している体制、軍事政権、一党独裁政権）が圧倒的に多数を占めてきた経緯がある。それ以後も地域紛争のなかで錯綜しながら強権的政治体制が再構築されているのが現実である。独裁者というのは（帝国）あるいは東西冷戦構造のもとでのアメリカ、ソ連（ロシア）、中国、キューバ、日本などの「眼差し」によって創られたものであることも少なくない。専制政治としての指導者が民主化の動きのなかでも新たに生まれているのも現実である。

２．研究の目的

本調査研究は、現代アフリカにおける独裁者の虚像と実像に関する民族学的研究という研究課題のもとに、独立後 50 年の経緯のなかで独裁者とよばれた指導者（為政者）をとりあげその虚像と実像を明らかにしようとするものである。具体的には、ガーナ、ケニア、ウガンダ、タンザニア、コンゴ民主（旧ザイール）、ギニアにおいて人類学を専門とする長期的な現地調査の経験がある研究者を中心に研究組織体制をとり、ンクルマ、ケニヤッタ、アミン、ニエレレ、モブツ、セク・トゥーレなどの為政者について人類学の手法をもちいてその虚像と実像を解明することが目的である。

３．研究の方法

本調査研究は、ガーナ、ケニア、ウガンダ、タンザニア、コンゴ民主（ザイール）において人類学を専門とする長期的な現地調査の経験がある研究者を中心に研究組織体制をとったことに特徴がある。これらの研究者は、政治人類学、開発人類学、宗教人類学、歴史人類学、自然人類学等を専門としている。また、連携研究者には都市計画学と社会学を専門とする研究者を研究組織体制に組み入れた。

本調査研究は、2010 年度から 2012 年度までの 3 年計画で実施した。調査実施国は、西アフリカのガーナ共和国、ギニア共和国、東アフリカのケニア共和国、ウガンダ共和国、タンザニア連合共和国、中部アフリカのコンゴ民主共和国（旧ザイール共和国）の 6 か国である。つまり、主たる研究方法は、国外におけるフィールド調査及び資料収集である。

アフリカの指導者を代表するンクルマ（ガーナ）、セク・トゥーレ（ギニア）、ケニヤッタ（ケニア）、アミン（ウガンダ）、ニエレレ（タンザニア）、モブツ（ザイール）を中心に独立後 50 年の歴史のなかで政治家の虚像と実像を解明した。

４．研究成果

2010 年度は、阿久津昌三がガーナのンクルマ、青木澄夫がケニアのケニヤッタ、梅屋潔がアミン、小泉真理がタンザニアのニエレレ、澤田昌人がコンゴ民主（旧ザイール）のモブツ、ウスビ・サコがギニアのセク・トゥーレ、阿部利洋が南アフリカの幹部を対象として調査研究を実施した。具体的には、阿久津昌三はンクルマに関する書誌学的な調査研究を行ない「自伝」をもとにンクルマの政治思想を分析した。青木澄夫は研究者、新聞記者等が執筆したケニアの指導者（為政者）に関する資料収集を行ない政治学的な「眼差し」を分析した。梅屋潔はウガンダの国立公文書館、マケレレ大学等でアミンに関する文献資料を収集するとともに、アミンの側近だった元閣僚の遺族とのインタビュー調査を実施した。小泉真理はエジンバラ大学にてニエレレに関する資料収集を行ない留学経験がニエレレの政治哲学にどのような影響を及ぼしたのかを分析した。澤田昌人は旧ザイールのモブツに関する文献収集を行ない独裁的なパーソナリティ形成が国際政治及び国内政治の相互交渉のなかでどのように形成されたのかを分析した。ウスビ・サコはギニアの首都コナクリで調査を行ない、政治的な変革のなかで公共建築及びモニュメントがどのように形成されたのかを分析した。阿部利洋は南アフリカのマンデラに代表されるＡＮＣ幹部がどのような社会統合のビジョンをどのように構想したのかを分析した。

2011 年度は、阿久津昌三がガーナのンクルマ、青木澄夫がケニアのケニヤッタ、梅屋潔がアミン、小泉真理がタンザニアのニエレレ、澤田昌人がコンゴ民主（旧ザイール）のモブツを対象として調査研究を実施した。阿久津

昌三は、ンクルマのニューヨーク・ハーレム、フィラデルフィアの留学時期及びロンドンの学生運動、労働運動、独立運動の時期を調査した。青木澄夫は、現地調査及び国内調査により日本人が見たケニヤッタ像を調査した。梅屋潔は、アミンを知る人物にインタビュー調査を行ない、録音、書き起こし、翻訳の作業を実施した。小泉真理は、昨年度のエジンバラ大学での調査を受けて、タンザニアの人びとにとってのニエレレ像に関する現地調査を行なった。澤田昌人は、ルムンバ暗殺に関与したとされるモブツについて調査研究を行なった。阿部利洋は、ロンドン大学政治経済学院及び東洋アフリカ研究学院において、独裁者の比較検討のための資料収集を行なった。

2012 年度は最終年度にあたるため、2012 年 6 月 30 日に、公開シンポジウム「アフリカ諸国における独立後 50 年の回顧と展望―独裁制と独裁者の再検討」と題して共同研究会を開催した。コメンテーターには、梶茂樹（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授）、小馬徹（神奈川大学人間科学部教授）、鈴木裕之（国士館大学法学部教授）、武内進一（日本貿易振興会アジア経済研究所地域研究センターアフリカ研究グループ長）を招聘した。

阿久津昌三は、ンクルマの新植民地主義と帝国主義批判を分析し、特に、コンゴ危機を事例としてンクルマの動向を調査した。青木澄夫は、ケニアやその指導者を事例として日本のメディア報道を調査した。梅屋潔は、アミン政権の閣僚であり、その命令で殺害された人物の関係者から未発表資料を入手して分析した。小泉真理は、ニエレレの青年期のイギリス留学経験が彼の政治活動や政策にどのように影響を及ぼしたのかを調査し、彼の政治哲学について検証した。澤田昌人は、東西冷戦構造期のアメリカ、旧ソ連の開示文書等を分析し、コンゴ危機を事例としてモブツの動向を調査した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

（1）小泉真理、ジュリアス・ニエレレの政治倫理について、清泉女学院大学人間学部紀要、清泉女学院大学人間学部、査読無、第 10 号、2013、1-12
（2）梅屋潔、多様な生を「民族誌」からうかがい知る、三色旗、慶應義塾大学通信教育部、査読無、782 号、2013、27-33
（3）梅屋潔、アフリカにある村における死霊の観念と施術師、そして呪い歌、地域構想学研究教育報告、東北学院大学、査読無、第 2 号、2012、70-80
（4）阿部利洋、警察改革とコミュニティ・ポリシング、アジ研ワールド、日本貿易振興会アジア経済研究所、査読無、No.206、2012、34-37
（５）Abe Toshihiro、Reconcilation as Process or Catalyst、Comparative Sociology、査読有、Vol.11、2012、785-814
（6）阿部利洋、参加にともなう公的承認―南アフリカ真実和解委員会とカンボジア特別法廷の事例から、平和研究、日本平和学会、査読無、38 号、2012 年、23-40
（7）阿久津昌三、クワメ・ンクルマの政治思想―『わが祖国への自伝』を読む、法学研究、慶應義塾大学法学研究会、査読無、第 84 巻第 6 号、2011、207-332
（8）阿久津昌三、アフリカ諸国 50 年の回顧と展望、慶應法学会ニュース、慶應義塾大学法学研究会、査読無、第 40 号、2011、9
（9）梅屋潔、私と「地域」とのおつきあい、地域構想学研究教育報告、東北学院大学、査読無、第 1 号、2011、63-70
（10）梅屋潔、ある遺品整理の顛末―ウガンダ東部トロロ県Ａ・Ｃ・Ｋ・オポス＝オフンビの場合、国立歴史民俗博物館研究報告、国立歴史民俗博物館、査読有、第 44 集、2011、209-240
（11）梅屋潔、佐渡ムジナと私、そして追悼クロード・レヴィ＝ストロース「構造主義」からの落ちこぼれの証言、比較日本文化研究、比較日本文化研究会、査読無、第 14 号、2011、56-74
（12）Oussouby Sacko、Sustainable Urban Housing Planning in Bamako:An Analysis of Housing Situation in Mali since Independence、Journal of International City Planning、査読有、ISCP、2010、897-906

〔学会発表〕（計 21 件）

（1）梅屋潔、1960 年代～1970 年代ウガンダの政治シーンを垣間見る―オフンビ家文書から、Workshop on Uganda Ethnographic Study「ウガンダ・アルバート湖岸の漁村に生成する共同性―移動と漁労に住まう人びと」シンポジウム、2013 年 3 月 16 日、大阪市立大学
（2）Abe Toshihiro、Lawyer Mandela’ Court Tactics and the Potential Function of South African TRC、International Forum on Conflict Resolution、2012 年 12 月 8 日、The Garden Hotel、Harare、Zimbabwe
(3)Sawada Masato、Uganda-DR Congo Relations since 1990’s with Special Reference to Oil Discovered in the Lake Albert Area、The XII International Scientific Meeting on Border Regions in Transition(BRIT)、2012 年 11 月 13 日、福岡

国際会議場
（4）阿部利洋、移行期正義と社会学、第 85 回日本社会学会、2012 年 11 月 3 日、札幌学院大学
（5）阿久津昌三、コンゴ危機、ンクルマ、ルムンバ、公開シンポジウム「アフリカ諸国における独立後 50 年の回顧と展望―独裁制と独裁者の再検討」、2012 年 6 月 30 日、信州大学
（6）青木澄夫、日本人が観たケニア独立闘争と闘士たち、公開シンポジウム「アフリカ諸国における独立後 50 年の回顧と展望―独裁制と独裁者の再検討」、2012 年 6 月 30 日、信州大学
（7）小泉真理、ジュリアス・ニエレレの政治社会倫理についての考察―人類学的アプローチ、公開シンポジウム「アフリカ諸国における独立後 50 年の回顧と展望―独裁制と独裁者の再検討」、2012 年 6 月 30 日、信州大学
（8）澤田昌人、コンゴ独立直後におけるルムンバ、モブツ、CIA、公開シンポジウム「アフリカ諸国における独立後 50 年の回顧と展望―独裁制と独裁者の再検討」、2012 年 6 月 30 日、信州大学
（9）梅屋潔、大統領アミンに殺害された、その右腕―1970 年代ウガンダにおける政治シーンを垣間見る、公開シンポジウム「アフリカ諸国における独立後 50 年の回顧と展望―独裁制と独裁者の再検討」、2012 年 6 月 30 日、信州大学
（10）阿部利洋、南アフリカの体制移行とポスト・マンデラの国民統合、公開シンポジウム「アフリカ諸国における独立後 50 年の回顧と展望―独裁制と独裁者の再検討」、2012 年 6 月 30 日、信州大学
（11）ウスビ・サコ、独立後ギニア共和国コナクリ市における各政権の都市政策と公共建築事業の実態、公開シンポジウム「アフリカ諸国における独立後 50 年の回顧と展望―独裁制と独裁者の再検討」、2012 年 6 月 30 日、信州大学
（12）阿部利洋、南アフリカにおけるカラード・アイデンティティの台頭、日本アフリカ学会第 49 回学術大会、2012 年 5 月 27 日、国立民族学博物館
（13）ウスビ・サコ、世界遺産をめぐる文化保存と地域観光促進の課題―ジェンネの事例を通して、日本アフリカ学会第 49 回学術大会、2012 年 5 月 27 日、国立民族学博物館
（14）梅屋潔、死霊は「恐怖」の対象か?―ウガンダ東部アドラ人の感情世界、第 20 回日本感情心理学会、2012 年 5 月 20 日、神戸大学瀧川記念会館
（15）青木澄夫、南洋を紹介した初期の日本語文献と伊藤友治郎、第 86 回東南アジア学会研究大会、2011 年 12 月 3 日、東海大学
（16）阿部利洋、カンボジア特別法廷とローカル・オーナーシップ、第 84 回日本社会学会、2011 年 9 月 17 日、関西大学
（17）青木澄夫、フィールドワークが大学生を育てる、日本アフリカ学会第 48 回学術大会、2011 年 5 月 22 日、弘前大学
（18）小泉真理、ジュリアス・ニエレレと英国留学―政治哲学思想、日本アフリカ学会第 48 回学術大会、2011 年 5 月 22 日、弘前大学
（19）阿部利洋、南アフリカにおけるコミュニティ・ポリシングの展開と課題、日本アフリカ学会第48回学術大会、2011年5月22日、弘前大学
（20）Abe Toshihiro 、Contesting on Undefined Concept of Reconcilation, Symposium on ‘Contextualizing Post-Reconcilation Violence:Globalization, Politics and Identities in Africa’、2011 年 1 月 20 日、Embassy of Japan、Nairobi、Kenya
（21）Oussouby Sacko 、Sustainable Urban Housing Planning in Bamako:An Analysis of Housing Situation in Mali since Independence、The International Symposium on City Planning 2010 in Nara、2010 年 8 月 29 日、奈良女子大学

〔図書〕（計 17 件）
（1）阿久津昌三、王制と無頭制、昭和堂、日本アフリカ学会編、アフリカを学ぶ辞典、2014 年（発刊確定）
（2）梅屋潔、加藤博・島田周平編『中東・アフリカ』（世界地名大辞典　第 3 巻）、朝倉書店、2012 年、1188
（3）阿久津昌三、王権、弘文堂、大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編集委員、見田宗介編集顧問『現代社会学事典』、2012 年、123
（4）阿久津昌三、古代社会、弘文堂、大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編集委員、見田宗介編集顧問『現代社会学事典』、2012 年、439
（5）青木澄夫、日本ケニア関係史Ⅰ－第 2 次世界大戦まで、明石書店、松田素二・津田みわ編『ケニアを知るための 55 章』、2012 年、302-307
（6）青木澄夫、日本ケニア関係史Ⅱ－第 2 次世界大戦後、明石書店、松田素二・津田みわ編『ケニアを知るための 55 章』、2012 年、308-313
（7）阿久津昌三、民族と言語―民族誌を読んで旅に出よう、明石書店、高根務・山田肖子編『ガーナを知るための 47 章』、2011 年、64-68
（8）阿久津昌三、祭礼―祭りは結衆の原点である、明石書店、高根務・山田肖子編『ガーナを知るための 47 章』、2011 年、141-145
（9）阿久津昌三、王制社会や首長制社会の宝庫―新たな歴史学の曙、明石書店、高根

務・山田肖子編『ガーナを知るための 47 章』、2011 年、162-165
（10）青木澄夫、解説、龍渓書舎、伊藤友次郎編『復刻版　南陽年鑑　全 4 巻』、2011 年、1-11
（11）梅屋潔、グローバル化と他者―今日のフィールドワークとは?、学陽書房、奥野克己・花渕馨也編『増補版　文化人類学のレッスン』、2011 年、48-53
（12）梅屋潔、大湖地方の王国の盛衰、牧畜民の移動―保護領以前、明石書店、吉田昌夫・白石壮一郎編『ウガンダを知るための 53 章』、2011 年、48-53
（13）梅屋潔、死者を葬る―農村の災いと死、そして施術師、明石書店、吉田昌夫・白石壮一郎編『ウガンダを知るための 53 章』、2011 年、176-180
（14）小泉真理、20 世紀初頭タンガニーカのトリロジー―大英帝国、伝道会、そして植民地の人びと、晃洋書房、井野瀬久美恵・北川勝彦編『アフリカと帝国―コロニアリズム研究の新思考にむけて』、2011 年、225-252
（15）阿部利洋、プロセスあるいは触媒としての和解―紛争後社会における和解概念をどうとらえるか、アジア経済研究所、佐藤章編『紛争と国家形成―アフリカ・中東からの視覚』、2011 年、19-39
（16）阿部利洋、南アフリカにおける和解政策後の社会統合―移民排斥問題とカラード・アイデンティティ・ポリティックスの台頭、アジア経済研究所、佐藤章編『紛争と国家形成―アフリカ・中東からの視覚』、2011 年、127-173
（17）阿部利洋、紛争後の治安回復―南アフリカのコミュニティ・ポリシング、アジア経済研究所、佐藤章編『紛争と国家形成―アフリカ・中東からの視覚』、2011 年、137-171

６．研究組織

(1)研究代表者

阿久津　昌三（AKUTSU SHOZO）
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：30201883

(2)研究分担者

青木　澄夫（AOKI SUMIO）
中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号：30424922
梅屋　潔（UMEYA KIYOSHI）
神戸大学・国際文化学研究科・准教授
研究者番号：80405894
小泉　真理（KOIZUMI MARI）
清泉女学院大学・人間学部・教授
研究者番号：20290992
澤田 昌人（SAWADA MASATO）
京都精華大学・人文学部・教授
研究者番号：30211949

(3)連携研究者

阿部　利洋（ABE TOSHIHIRO）
大谷大学・文学部・准教授
研究者番号：90410969
ウスビ　サコ（OUSSOUBY SACKO）
京都精華大学・人文学部・准教授
研究者番号：70340510